

小野梓 傑出した民権論者で、政治と学校両面で大隈重信から最も信頼されるも早世、早大関係者が尊崇し続ける。

おのおずさ

万次郎帰国・1852 = 土佐国幡多郡宿毛(高知県宿毛市)で、高知藩老伊賀氏に仕えた軽格の家に生まれる。

ペリー来航・1853 = 1歳 :

桜田門外変・1860 = 8歳 :

遣欧使節・1861 = 9歳 :

少年のころ漢学校や私塾で漢籍を学んだ。

明治維新・1868 = 16歳 : <戊辰戦争>で高知藩の機勢隊に入り、出羽国荘内方面の戦闘に加わる。

戊辰戦争終・1869 = 17歳 : 上京して昌平校に通学。

初の日刊新聞1870 = 18歳 :

廃藩置県・1871 = 19歳 : アメリカに遊学して、法学を学び、

学問のすすめ1872 = 20歳 : 大蔵省の留学生としてイギリスに転じ、財政学などを学んで、

明治6年政変 1873 = 21歳 :

佐賀の乱・1874 = 22歳 : 帰国。まもなく共存同衆というグループをつくり、その中心となって、ヨーロッパ思想の啓蒙に努める。

三つの反乱・1876 = 24歳 : 司法少丞に任官し民法課副長。以後官途を歩みながら、憲法の体系的構想「国憲汎論」を書き続け、

西南戦争・1877 = 25歳 : 司法少書記官ついで太政官少書記官を兼ね法制局専務となる。

大久保暗殺・1878 = 26歳 : 元老書記官に転任したが、同年再び太政官少書記官・法制局専務となる。

琉球処分・1879 = 27歳 : 政府は官吏の公衆への演説を禁じたが、翌年にかけて多くの政治的学術的論文を「共存雑誌」に発表、

..... 1880 = 28歳 : 会計検査院新設とともに3等検査官ついで2等検査官となり、会計法および会計検査院職制章程を起草した。

そのころから参議大隈重信と接触し始め、

明治14年政変1881 = 29歳 : \*「今政十宜」「再び施治の方書を論ず」を大隈におくる。1等検査官に昇進したが、たまたま北海道開拓使官有物私下問題が起ったので、私下処分の非を議する意見書を草し他の検査官とともにこれを内閣に提出しようとして遂げられず、「若し我自ら当らば」を草し東北行幸の明治天皇に従い帰京の途上にあった大隈へおくり、藩閥政府が私下げを強行すればこれを種にして政府を攻撃し、憲法制定をかちとるべきであるとすすめる。勅諭が下り大隈の辞職が決まったため、小野も依願免官となる。まもなく大隈や河野敏謙をたずね、政党組織の準備にとりかかる。彼を中心とするグループ(臨渡会)の小川為次郎・高田早苗らに助けられる。この年、はじめて嗜血。「何以結党」に続いて、

新体詩抄・1882 = 30歳 : \*「施政の要義」を起案、立憲改進黨の趣意書として発表され、党の掌事におされる。大隈と協議して早稲田大学の前身である東京専門学校を設立。以後、党務と遊説、大隈の代行者としての校務と講義のために忙しい中、ライフワークの「国憲汎論」上巻、

岩倉具視没・1883 = 31歳 : 中巻を出版。国憲私案を草し壬午協会で検討。出版社東洋館を興し、出版事業を行なう(これは死後坂本嘉治馬に引きつがれ、富山房として発展する)。

秩父事件・1884 = 32歳 : 立憲改進黨の解党問題が起り大隈が脱党した際、掌事を辞し党から離れた。嗜血がつづき肺患は次第に重くなるにも屈せず著述がすすめられ、

内閣発足・1885 = 33歳 : \*最終章に「立憲国民の具備すべき六質を論ず」を加えた「国憲汎論」下巻を出して完成し、

帝国大学始・1886 = 34歳 : 東京神田錦町の家で没した。